

# チャウサーの話法の伝達動詞を考える —『トロイラスとクリセイデ』の場合—

中尾 佳行\*

Chaucer's Speech and Thought Representations through their Reporting Verbs:  
The Case of *Troilus and Criseyde*

Yoshiyuki NAKAO\*

## ABSTRACT

This paper is an attempt to describe and explain how the reporting verbs of speech/thought representations are structured and functional in *Troilus and Criseyde*. Based on the hierarchical structure of subjectivities and the classification of speech/thought types (see Nakao 2018a), I investigated the reporting verbs from various angles: the frequency of word types and tokens of speech/thought in the narrative, the frequency of direct and indirect speech/thought according to the main characters and Book numbers (Books 1 to 5), the balance of direct and indirect speech/thought, the balance of speech and thought, the varieties of reporting verbs, the syntactic positions of reporting verbs and degrees of grammaticalization, the deletion of reporting verbs and its effects, and the subjectivities not closed to them but open to alternatives. Through these angles I found that the reporting verbs are able to play significant reference points in constructing Chaucer's speech/thought representations in *Troilus and Criseyde*.

キーワード:『トロイラスとクリセイデ』、話法、表現主体、伝達動詞、seyde、quod、直接話法、  
間接話法、スピーチと思考、劇的手法、文法化、開かれた主体

## 1.はじめに：本論の目的、背景、方法

チャウサーの『トロイラスとクリセイデ』(*Troilus and Criseyde*)は、彼の作品において最も完成度の高い5巻構成、トータル8,239行の長編詩である(第1巻:1,092行、第2巻:1,757行、第3巻:1,820行、第4巻:1,701行、第5巻:1,869行)。古代のトロイ・ギリシャ戦争を舞台に、トロイの王子トロイラス(Troilus)とトロイの宮廷貴夫人で寡婦、クリセイデ(Criseyde)の恋愛の成就と破綻を描いている。この二人の主人公に加え、両人の恋の橋渡しをするトロイラスの友、またクリセイデの叔父に当たるパンダラス(Pandarus)、そしてクリセイデの捕虜交換と相まって彼女が遂には屈していくギリシャの武将、ディオメデ(Diomedes)が主要登場人物である。中世の伝統的ロマンスは、戦争と恋が二大柱で展開するが、本作品では、戦争は背景化し、二人の愛の心理的な戦争、葛藤が前景化、Kittredge (1970)は「心理小説」とまで評している。登場人物は心理分析が細部に施され、人格化、彼らは何をどのように話すかは極めて重要で、いわば語りの中に劇的な手法が組み込まれている。他方、語り手は登場人

---

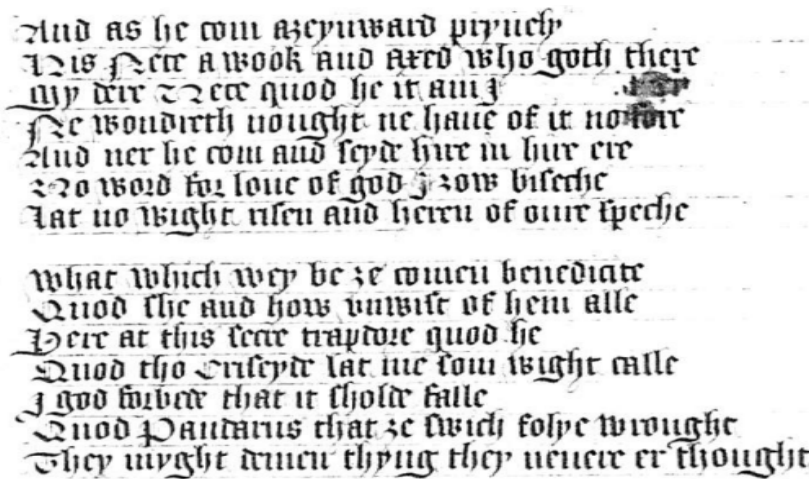
\*大学教育センター教授

物の一人ではなく、登場人物を第三者的にも観察できる、3人称語り手で登場する。とは言え、語り手も半ば人格化され、人物にある時は共感して近づき、ある時は批判的に距離を置き、つかず離れずで微妙な振る舞いをしている。

人物の言葉(台詞)と語り手の言葉(人物の言動の編集、人物の言動に対する評価、背景描写、物語のメタコメントなど)を分化し、またそれぞれの表現の意味付けにおいて、話法は無視できない問題である。話法はどのように言い表されているであろうか。チョーサーの『トロイラスとクリセイデ』は彼の他の作品と同様、写本という形で残されている。写本では文法的な句読点は施されてなく、ましてや人物の言葉と語り手の言葉を分節する引用符は皆無である。本作品は基本口承的語りで、語り手・プレゼンターのジェスチャー、表情、声色などにより、ある程度は分節が可能である。しかしプレゼンターが演出の根拠にするのは、写本そのものである。

チョーサーは、テキスト上に話法を分節できるように工夫している。その典型的な方法が伝達動詞と被伝達部の言語指標である。1)は本作品の最も信頼性の高い写本 *Corpus Christi Cambridge MS 61* からの一例である。場面は、第3巻でパンダラスがトロイラスとクリセイデの密会を彼の家でまさに実現させようとしているところである。嵐の来る日を予測し、その日にクリセイデを夕食に招待する。夕食後計画通り嵐となり、彼女は有無をいわず彼の家に泊まることになる。トロイラスは既にパンダラスの家でわくわくしながら待機している。パンダラスは彼女が寝ている部屋にこっそり入って来て、いよいよ二人の恋の密会が遂行されようとする。

1) Parkes & Salter (1978), *Corpus Christi College Cambridge MS 61*, 76 verso



テキスト上のスピーチは、まず伝達動詞“axed”、“quod”、“seyde”で合図され、その言語指標は被伝達部に畳みかけられる。疑問文“Who ... ?”、“which wey ...”、“how ...”;呼びかけ“My dere nece”;感嘆詞“What”、“I”、“benedicite”;直示語“I”、“yow”、“nere”、“Here”、“this”;命令文“Ne wondreth nought...”、“ne have of it no fere”、“Lat no wight risen...”、“Lat me som wight calle”;省略文“And how”、“unwist of hem alle”、“Here at this sece trape-dore”。人物の言葉の発話行為特性が際立てられ、語り手の語り部に対し一線を画している。他方、チョーサーのテキストの底本、Cp 写本を基盤に編集された Benson (1987)では、当該部は2)の通りである。

2) And as he com aseyward pryvely,

His nece awook, and axed, “Who goth there?” (下線は筆者)

“My dere nece,” quod he, “it am I.

Ne wondreth nought, ne haue of it no fere.”

And ner he com and seyde hire in hire ere,

“No word, for love of God, I yow biseche!  
Lat no wight risen and heren of oure speche.”

“What, which wey be ye comen, benedicite?”  
Quod she; “And how, unwist of hem alle?”

“Here at this secre trappe-dore,” quod he.  
Quod tho Criseyde, “Lat me som wight calle!”

“I! God forbede that it sholde falle,”

Quod Pandarus, “that ye swich folye wroughte!

They myghte demen thyng they nevere er thoughte. Tr 3.750-63

(チョーサーテキストの引用とチョーサー作品の略語は Benson (1987)に拠る。)

Benson は文法的句読点を付し、現代の読者に読みやすく、被伝達部は引用符 (double quotation mark) で識別している。句読点にはもちろん編者の解釈が含まれる。写本と刊本の相互チェックが必要である(写本・刊本の異同と ambiguity の問題は、Nakao 2013: 47-65 を参照)。

伝達動詞と一口に言っても、そのバリエーションと機能は一律ではない。動詞には多様性があり、その頻度にも大きなばらつきがある。彼・彼女の言葉は相手に直に語ったスピーチなのか、それとも心の中で発せられた思考なのか。伝達動詞によっては、視点と共に被伝達部を生み出すプロセス、つまり、ジェスチャー、心的態度、あるいは音調を同伴させてもいる。伝達動詞が間接話法に使用される場合、直接話法のものと同じではない。更に意味論的には、伝達動詞は一つの参照点で、他の表現主体にも開かれ、思わぬ広がりを見せてもいる。

これまでチョーサーの話法は、人物の個性化が近代小説のように行われていない、従って話法の分化は未発達であると考えたため、十分な考察対象とはなっていない。ましてや上記に示した伝達動詞への問いかけは部分的な扱いで、分類的・記述的な調査は行われていない。本論の目的は、この伝達動詞、1) で見た *seyde*、*quod* はその典型例である、に着目し、その構造と機能を体系的に捉えることである。このことを通してチョーサーの話法を解明する一助としたい。

## 2. 先行研究と研究課題

### 2.1. 先行研究

従来中世英文学の話法研究は、人物の個性化が不十分である、被伝達部のコンテンツが権威的・類型的で、誰が言っても同じである、あるいは人格的な一貫性が見られないなどの理由から、消極的である。チョーサーについても例外ではない。Fludernik (1993)は話法の分類を試みている。しかし主体の問題は、語り手と人物の融合形である自由間接話法 (FIS/FIT) の考察を除き不十分である。他方、Spearing (2005)は主体の重層性の問題に焦点を当てたものの話法の分類的な記述はしていない。Moore (2011)は直接話法に絞った研究で、話法タイプの多様性には言及していない。中世作品を複数取り上げ伝達動詞を調査しているが、直接話法に限定、被伝達部の言語特徴も直接話法のみで、間接話法との比較検討はしていない。写本を通した主体の揺らぎの指摘は示唆的であるが、主体の構造化は等閑視されている。

先行研究では話法の研究への消極性と相まって、伝達動詞そのものについての体系的な研究は行われていない。劇的な特性を多分に持つ『トロイラスとクリセイデ』において、伝達動詞がどのように構造化され、どのような機能を果たしているかについての考察は、今尚課題として残っている。

### 2.2. 研究課題

本論は、『トロイラスとクリセイデ』の話法の伝達動詞に着目し、その構造と機能を記述・説明することを目的とする。伝達動詞の種類と頻度、スピーチと思考の識別、動詞の統語的位置と文法化の度合い、動詞の記述性の度合い、直接話法の伝達動詞と間接話法のそれとの違い、動詞の被伝達部の

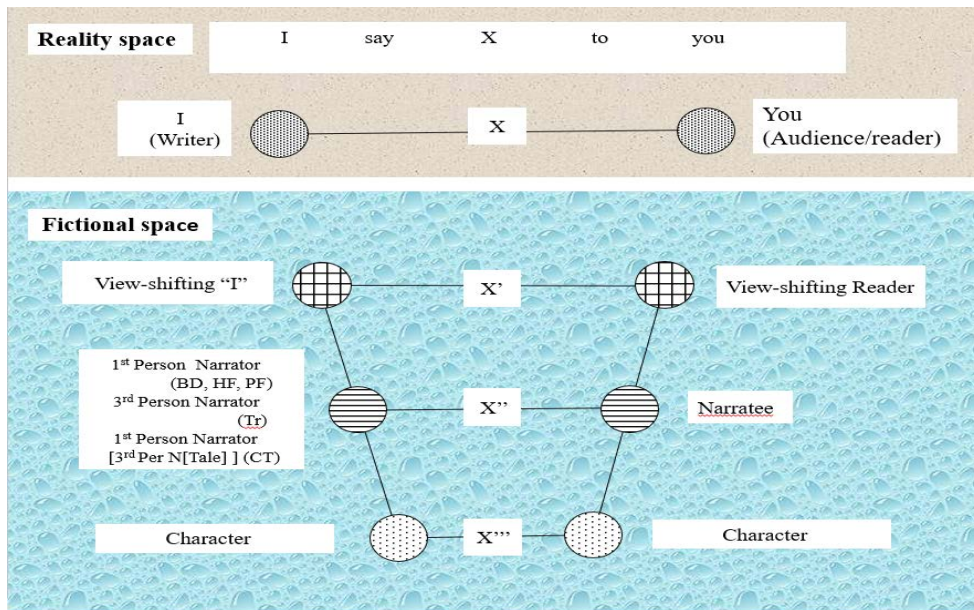
語数、他作家の伝達動詞との比較など、多面的に検討する。

### 3. 方法論

#### 3.1. 理論的基盤

中尾 (2018a: 22-23) において、3)と4)に示す通り、次の2点をチョーサーの話法を捉える理論的基盤とした。(1)話法の表現主体は Reality space と Fictional space に二分され、前者は現実世界での作家、後者は最も低次の登場人物 (character) から、中間の語り手を経て、高次の「視点の転換装置」(物語に実在する語り手ではなく、読者によりコンセプトとして生み出されていく語り手、view-shifting “I”)へと階層的に構造化されること。(2)それぞれの表現主体は、登場人物の経験の忠実な再現から語り手の介入(編集)の強いものまで段階的で、話法タイプを通して表出されること。

#### 3) 表現主体の多次元構造



注1: X は発信者と受信者の間で形成されるストーリーラインを示す。

注2: BD=*The Book of the Duchess*, HF=*The House of Fame*, PF=*The Parliament of Fowles*, Tr=*Troilus and Criseyde*, CT=*The Canterbury Tales*

#### 4) Fleischman (1990: 220) に基づくスピーチと思考の再現 (Short 1982:184 参照)

Character apparently in control	←—————→	Narrator apparently in control
Speech presentation:	FDS      DS      FIS      IS      NRSA      NRA ←	
	 norm	norm
Thought presentation:	FDT      DT      FIT      IT      NRTA      NRA	 norm
		(S=Speech; T=Thought)

Examples:

DS/T (direct S/T): She said/thought, “I really like it here in Berkeley.”

IS/T (indirect S/T): she said/thought that she really liked it there in Berkeley.

FDS/T (free direct S/T): I really like it here in Berkeley.

FIS/T (free indirect S/T): She really liked it here in Berkeley.

NRS/TA (narrator’s report of an S/T act): She expressed/pondered her pleasure at being in Berkeley.

NRA (narrator’s report of an act): She liked Berkeley a lot.

伝達動詞は、表現主体を明示し、同時に話法タイプの弁別に役立つ。本論は、3)と4)を理論的基盤として踏まえ、伝達動詞の構造と機能を考察する。伝達動詞を通して表現主体と話法タイプが比較的明確な話法、4)の DS/T と IS/T を中心に考察する(以下、この話法の分類に基づくが、タイプ名を略さずに、DS/DT、IS/IT と記述する)。

### 3.2. 人物の言葉と語り手の言葉の判断基準

Benson (1987)の句読点を基本的に参照するが、句読点から解放された写本情報(伝達動詞と被伝達部の言語指標を含む)にも注意を払い人物と語り手の言葉を識別する。話法の問題において、写本及び刊本の異同は無視できないが、これについては既に Nakao (2018b: 253-55)で論じているので参照されたい。

### 3.3. 調査手順

伝達動詞の構造と機能は、次の手順で考察していく。

- [1] 語りにおける主要登場人物の言葉 (DS/DT, FDS/FDT)
- [2] 主要登場人物の直接話法(DS/DT, FDS/FDT)と間接話法(IS/IT)
- [3] 主要登場人物のスピーチ (DS, IS)と思考(DT, IT)
- [4] 伝達動詞のバリエーション
- [5] seyde と quod の統語的位置と文法化
- [6] seyde と quod の被伝達部の語彙数
- [7] 伝達動詞の時制
- [8] 直接話法の伝達動詞ゼロ化 (FDS/FDT)
- [9] 間接話法の伝達動詞ゼロ化: 自由間接話法 (FIS/FIT)の出現
- [10] 伝達動詞を超えて: 開かれた主体

## 4. 検証

### 4.1. 語りにおける主要登場人物の言葉 (DS/DT, FDS/FDT)

本作品の主要登場人物の言葉は語り手の言葉に対してどの位あるのか、人物ごと、巻ごとに使用語彙の Type と Token 頻度を示したのが表 1・図 1 である！。

表 1: 人物と語り手の巻別語彙 Type・Token 頻度

	T-B1	T-B2	T-B3	T-B4	T-B5	C-B2	C-B3	C-B4	C-B5	P-B1	P-B2	P-B3	P-B4	P-B5	D-B5	N-B1	N-B2	N-B3	N-B4	N-B5
Type	619	213	817	1039	1030	751	688	1002	542	976	1431	892	676	550	484	1242	1338	1670	1184	1685
Token	1577	380	2470	3563	3464	2224	2036	3297	1475	2832	5462	2973	1789	1286	1243	4062	5307	7218	4145	7098

注: T はトロイラス、C はクリセイデ、P はパンダラス、D はディオメーデ、そして N は語り手を示す。B1, B2, B3, B4, B5 は巻番号を示す。T-B1 は、例えば、第 1 巻でのトロイラスの語彙 Type・Token 頻度を示す。

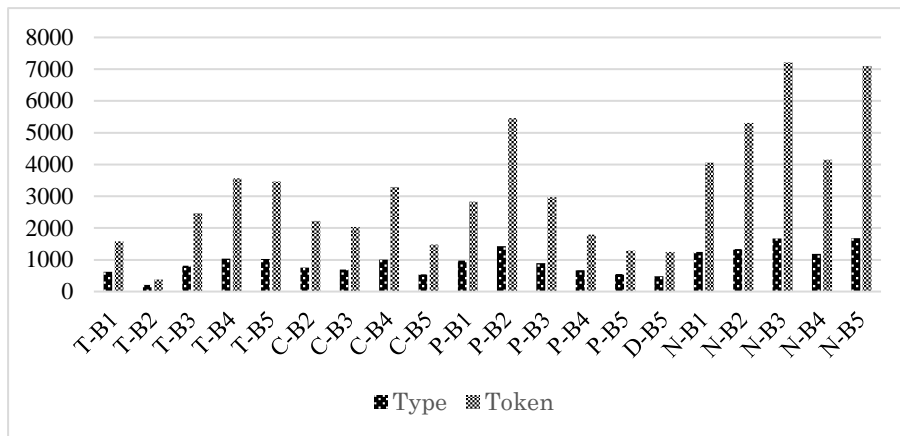


図 1:人物と語り手の巻別語彙 Type・Token 頻度

表 2・図 2 は主要登場人物と語り手の総計である。

表 2: 人物と語り手の語彙 Type・Token 頻度の総計

	Troilus	Criseyde	Pandarus	Diomede	Total-ch	Narrator
Type	3718	2983	4525	484	11710	7119
Token	11394	9032	14342	1243	29063	27820

注:Total-ch は主要登場人物全体の頻度を示す。

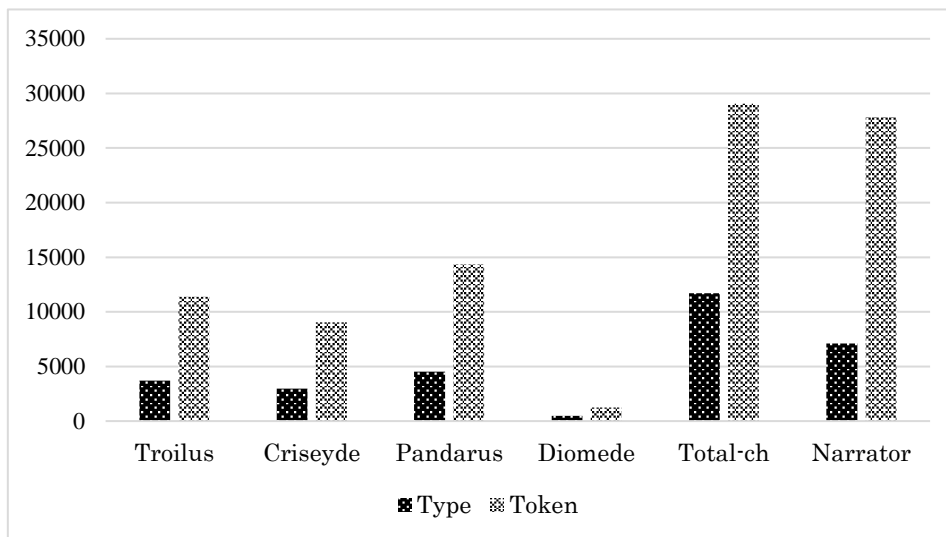


図 2: 人物と語り手の語彙 Type・Token 頻度の総計

Type 頻度に応じて当然のこと Token 頻度は増している。表 1・図 1 においてトロイラスは第 4 巻が最も多く、次いで第 5 巻、そして第 3 巻、第 1 巻と続き、第 2 巻は極端に少ない。クリセイデは第 4 巻が最も多く、次いで、第 2 巻、第 3 巻、第 5 巻と少なくなる。パンダラスは第 2 巻が最も多く、次いで第 1 巻、第 3 巻、そして第 4 巻、第 5 巻が極端に減少する。人物の巻別語彙頻度は、概ね彼らがどのような役割を担っているか、その人物造型(人格化)に平行している。第 1 巻ではトロイラスよりもパンダラスが多い。パンダラスはトロイラスからクリセイデへの恋を聞き、どのようにして恋を叶えていくか知恵を絞り、助言している。第 2 巻ではトロイラスが一番少なく、初めて登場するクリセイデが彼よりも多く、一

番多いのがパンダラスである。パンダラスはクリセイデにトロイラスの恋を伝えるが、彼女は宮廷貴夫人としての名誉を失うのではないかと躊躇する。彼は彼女にいかにかそれを受け入れさせるか、言葉を尽くしていく。第3巻ではトロイラスが最も多く、クリセイデが最も少なく、パンダラスは両者の中間である。トロイラスはクリセイデとの愛の成就でその喜びを表し、パンダラスはトロイラスとクリセイデの橋渡しとして忙しく言動する、クリセイデは受動的に受け入れていく。第4巻ではトロイラスとクリセイデが多く、パンダラスは少ない。クリセイデの捕虜交換の決定後、トロイラスと彼女はいかに対応するか意見交換するが、パンダラスはもはや策を講じられなくなっていく。そして第5巻ではトロイラスが一番多く、クリセイデとパンダラスはともに少ない、ディオメーデは初めて登場するが、クリセイデとパンダラスとほど同じ位である。トロイラスはギリシャ陣営に送られたクリセイデに愛の苦悩を吐露するが、クリセイデの反応は消極的、パンダラスの知恵はもはや限界に達する。トロイラスに替わってディオメーデがクリセイデに求愛し、彼女は遂に屈する。

表2・図2の人物と語り手の総計において、パンダラスが最も多く、次いでトロイラス、そしてクリセイデである。ディオメーデは最も少ない。人物と語り手を比べると、両者は拮抗し、語りの中に劇的な要素が色濃く組み込まれていることが分かる。劇的な要素は人物の人格化と彼・彼女の表現の分化(事態の認識の仕方が言語に反映する)を可能にし、本作品において話法は重要な役割を果たすことになる<sup>2</sup>。

#### 4.2. 主要登場人物の直接話法(DS/DT, FDS/FDT)と間接話法(IS/IT)

1)と2)に示したように、伝達動詞と被伝達部の言語特徴(人物の発話行為的特徴、語り手が介入した間接的な言い換え)に基づき、加えて Benson (1987)の句読点を参照して直接話法と間接話法は基本的に判別可能である<sup>3</sup>。主要登場人物は DS/DT(若干数だが FDS/FDT を含めている)と IS/IT をどのように使っているか、その全体像を示したのが表3・図3である。

表3: 人物・巻別話法(DS/DT/IS/IT)頻度

	1T	1P	2T	2C	2P	3T	3C	3P	4T	4C	4P	5T	5C	5P	5D
DS	18	21	12	48	74	18	31	45	13	15	8	14	2	9	4
DT	6	0	3	10	2	10	5	1	7	2	1	17	3	3	4
IS	1	0	1	3	2	5	3	4	1	1	0	6	5	2	4
IT	0	0	1	4	0	6	3	1	6	0	0	14	1	0	2

注: 番号は巻を、T, P, C, D はそれぞれ主要登場人物の頭文字を示す。

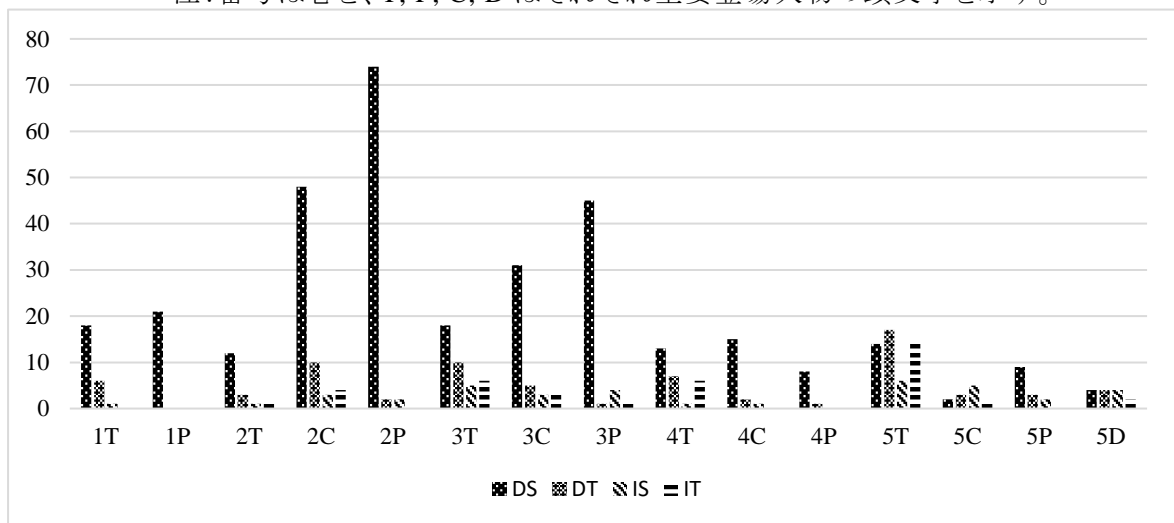


図3: 人物・巻別話法(DS/DT/IS/IT)頻度

表3・図3のデータを基に直接話法と間接話法に分けたのが表4・図4である。

表4: 直接話法 (DS/DT) と間接話法 (IS/IT)

	1T	1P	2T	2C	2P	3T	3C	3P	4T	4C	4P	5T	5C	5P	5D
DS/DT	24	28	15	58	76	28	36	46	20	17	9	31	5	12	8
IS/IT	1	0	2	7	2	11	6	5	7	1	0	20	6	2	6

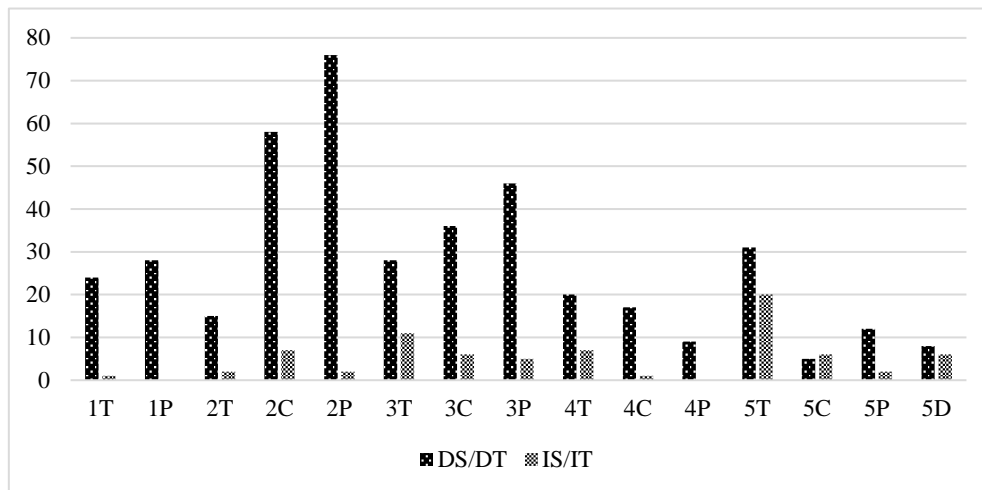


図4: 直接話法 (DS/DT) と間接話法 (IS/IT)

直接話法が間接話法を圧倒している。直接話法が間接話法より多い第一の要因は4.1で述べた本作品の劇的手法によるものと考えられる。言うまでもなく劇は全て直接話法で展開する。第二的な要因は、本作品が基本口承的伝達であることである。聴衆との距離は縮められ、臨場感を持って演じられる。チャオサーはコンテンツないし筋を示すことに留まらず、人物の身体化、つまり表現に投影される知覚、感情、心理を描き出そうとしている。この点間接話法は、書き言葉的であり、人物の身体性は後退する。

巻ごとに見ると、直接話法はトロイラスとクリセイデの恋がパンダラスを介して進行する最初の3巻で、大半を占めている。しかし、トロイラスを見るに、クリセイデの捕虜交換が決定した第4巻、そしてギリシャ陣営に彼女が送られた第5巻においては、間接話法が他の巻に比し大きく増えている。クリセイデはギリシャ陣営で、二人の距離は否めない。直接話法と間接話法は自律的に価値付けられるというよりは、対比されることで各々の特徴が際立てられる。間接話法は過去形で行為のエンドポイント・結果を示し、他方、直接話法は現在形でエンドポイントは無く、結果に向けたプロセスを示す。第5巻において、トロイラスはクリセイデにトロイに帰ってほしい、と切々と長文の手紙をDS (Tr 5.1317-1421)で表出する。反面、クリセイデは5)のようにトロイラスにISで応える。おぞなりの返答(結論)である。

5) Of which hire answer in effect was this:

Ful pitously she wroot ayeyn, and seyde, (波線は筆者)

That also sone as that she myghte, ywys,

She wolde come, and mende al that was mys.

And fynaly she wroot and seyde hym thenne,

She wolde come, ye, but she nyste whenne. Tr 5.1423-28

中世の他作家において直接話法と間接話法の度合いはどうか。Gowerの*Confessio Amantis*の一つのTale、第8巻、Apollonius of Tyre(父親が娘を無理やりに犯したことの罪深さを、家族愛の大切



さで逆照射したストーリー)においては、表 5・図 5 に示すように、間接話法と直接話法はほぼ同頻度である。話法のコンテンツ自体が重視され、チョーサーのようなスピーチの発話行為的な特徴は後退している。

表 5: Gower: Apollonius of Tyre の話法

	DS	DT	IS	IT
Gower: Apollonius of Tyre	35	0	40	7

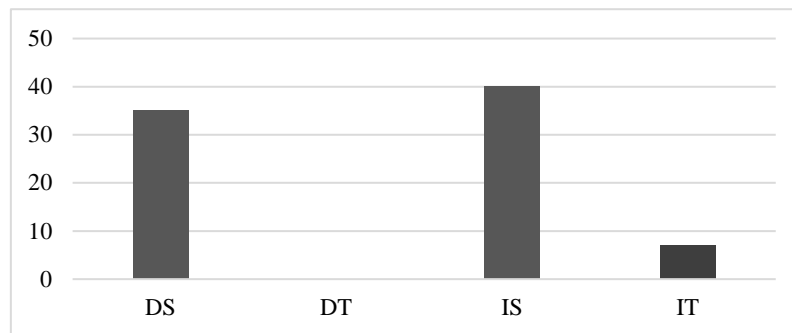


図 5: Gower: Apollonius of Tyre の話法

間接話法を 2 例挙げておこう。

6) Bot yit dorste he nocht seie nay,  
 Bot swor and seide he schal fulfillen  
 Hire hestes at hire oghne wille. 1370-72

This king unto this maide opposeth,  
 And axeth ferst what was hire name,  
 And wher sche lerned al this game  
 And of what ken that sche was come. 1712-15

間接話法における時制の一致を見てみよう。現代英語では、伝達動詞が過去形の場合、その被伝達部は普遍的な真実として時制の一致がある。『トロイラスとクリセイデ』においては時制の一致が見られた。

7) And right with that was Antenor ycome  
 Out of the Grekis oost, and every wight  
 Was of it glad, and seyde he was welcome. Tr 5.71-73

他方、チョーサーの他作品、また同時代の Gower の作品 (6) の最初の例を参照) では、時制の不一致が見られる。8) はチョーサーからの例で、間接話法で始めながら徐々に直接話法に近づいていることが分かる (“Bityde what bityde!” は感嘆文)。

8) And there he swor on ale and breed,  
 How that the geaunt shal be deed,  
 Bityde what bityde! *The Canterbury Tales, The Tale of Sir Thopas, VII 872-74*

## 4.3. スピーチと思考

表3・図3を基にスピーチと思考に分けたのが表6・図6である。

表6: スピーチ (DS/IS)と思考 (DT/IT)

	1T	1P	2T	2C	2P	3T	3C	3P	4T	4C	4P	5T	5C	5P	5D
DS/IS	19	21	13	51	76	23	34	49	14	16	8	20	7	11	8
DT/IT	6	0	4	14	2	16	8	2	13	2	1	31	4	3	6

人物の言葉はスピーチだけではなく、程度差はあるものの思考が見られる。「心理小説」と称される所以である。トロイラス、クリセイデ、パンダラスを比べると、トロイラスが全巻を通して最も頻度が高く、次いでクリセイデ、パンダラスが最も少ない。ディオメーデは第5巻にのみ登場するが、彼はスピーチと思考が拮抗している。

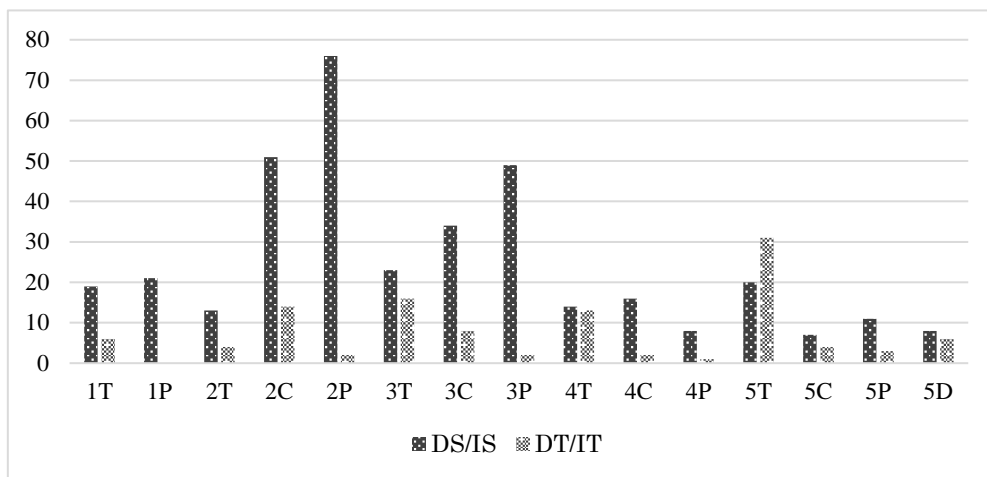


図6: スピーチ (DS/IS)と思考 (DT/IT)

思考の頻度には劇的な手法としての人格化と話法の分化が大きく関わっているように思える。トロイラスは恋するものの自ら行動することができず、パンダラスに依存的、すぐにも現実世界を回避し、想像世界へと没入する傾向がある。第3巻でトロイラスはパンダラスの介在でクリセイデとの愛の成就に至るが、9)に見るように、その直前、目の前の現実に対応せず、愛の神々への祈りへと逃避する。

9) Than seyde he thus: "O Love, O Charite!

Thi moder ek, Citheria the swete,

After thiself next heried be she —

Venus mene I, the wel-willy planete! —

And next that, Imeneus, I the grete,

For nevere man was to yow goddes holde

As I, which ye han brought fro cares colde. Tr 3.1254-60

このトロイラスの性向は思考の頻度で裏書きされる。クリセイデは宮廷貴夫人として自分の名誉を守り、同時にトロイラスの愛を受け入れるか否か自己葛藤するが、それは思考の頻度を高めている。

10) She thoughte wel that Troilus persone

She knew by syghte, and ek his gentillesse,

And thus she seyde, "Al were it nat to doone  
To graunte hym love, yet for his worthynesse  
It were honour with pley and with gladnesse  
In honestee with swich a lord to deele,  
For myn estat, and also for his heele. Tr 2.701-07

パンダラスは二人の間を行ったり来たり活動的で、恋を取り持つべく世俗的知恵を駆使、説得する。スピーチが大半を占めるが、時に二人の言動に対し思考で本音を吐露する。

11) Pandare answerde, "It may be, wel ynough,"  
 And held with hym of al that evere he seyde.  
 But in his herte he thoughte, and softe lough,  
 And to hymself ful sobreliche he seyde,  
 "From haselwode, there joy Robyn pleyde,  
Shal come al that thow abidest heere.  
Ye, fare wel al the snow of ferne yere!" Tr 5.1170-76

第5巻で登場するディオメーデは、クリセイデをいかに説得して、自分の求愛を受け入れさせるか、その手練手管を思考で吐露する。

12) He nyst how best hire herte for t'acoye;  
 "But for t'asay," he seyde, "naught n'agreveth,  
For he that naught n'asaieth naught n'acheveth." Tr 5.782-84

#### 4. 4. 直接話法 (DS/DT) の伝達動詞

直接話法の伝達動詞(本作品全体)は、表7・図7に示すように、seyde と quod が中心的で、頻度こそ少ないが相当度のバリエーションがある。

直接思考は thoughte だけではなく、seyde によっても再帰代名詞を伴い、またそれを省略して(9)、12)の例参照)表されている。

13) "Ye, haselwode!" thoughte this Pandare,  
 And to hymself ful softeliche he seyde,  
 "God woot, refreyden may this hote fare,  
 Er Calkas sende Troilus Criseyde!"  
 But natheles, he japed thus, and pleyde,  
 And swor, ywys, his herte hym wel bihighte  
 She wolde come as soone as evere she myghte. Tr 5.505-11

また seyde については、answerde and seyde のような連結形が見られる。連結形では発話行為の導入を強化し、相手に<反駁>するような態度を描き出してもいる。14)では夢を真実の証として捉えるトロイラスをパンダラスは「夢は人をだますもの」と一蹴する。

14) Pandare answerde and seyde, "Allas the while  
 That I was born! Have I nat seyde er this,  
That dremes many a maner man bigile?  
And whi? For folk expounden hem amys.

How darstow seyn that fals thy lady ys  
 For any drem, right for thyn owene drede?  
 Lat be this thought; thow kanst no dremes rede. Tr 5.125-81

表 7: 直接話法 (DS/DT) の伝達動詞

	Book 1	Book 2	Book 3	Book 4	Book 5
seyde	10	49	32	15	14
seyde (self)	5	8	3	5	16
modal+seye	0	0	1	1	2
modal+seye (self)	1	0	0	1	0
quod	23	86	55	22	10
quod (self)	0	0	2	1	5
spak	0	1	1	1	1
modal+speke	0	0	1	0	0
spak and seyde	0	1	0	0	2
spake and seyde (self)	0	0	0	0	1
spak and tolde	0	0	0	0	1
wrot and seyde	0	0	0	0	2
answerde	2	5	7	6	5
cryde	1	2	0	1	2
thoughte	1	6	3	1	5
modal+preyse	0	1	0	0	0
modal+warien	0	1	0	0	0
song	0	1	0	0	0
modal+synge	0	0	1	0	1
modal+shoute	0	1	0	0	0
molda+jangle	0	1	0	0	0
swor	0	0	1	0	0
axed	0	0	1	0	0
preyde	0	0	0	1	0
modal+talke	0	0	0	0	1

注 1: self はスピーチ (DS) でなく、思考 (DT) で用いられていることを示す。

注 2: modal は法助動詞と gan を含んでいる。

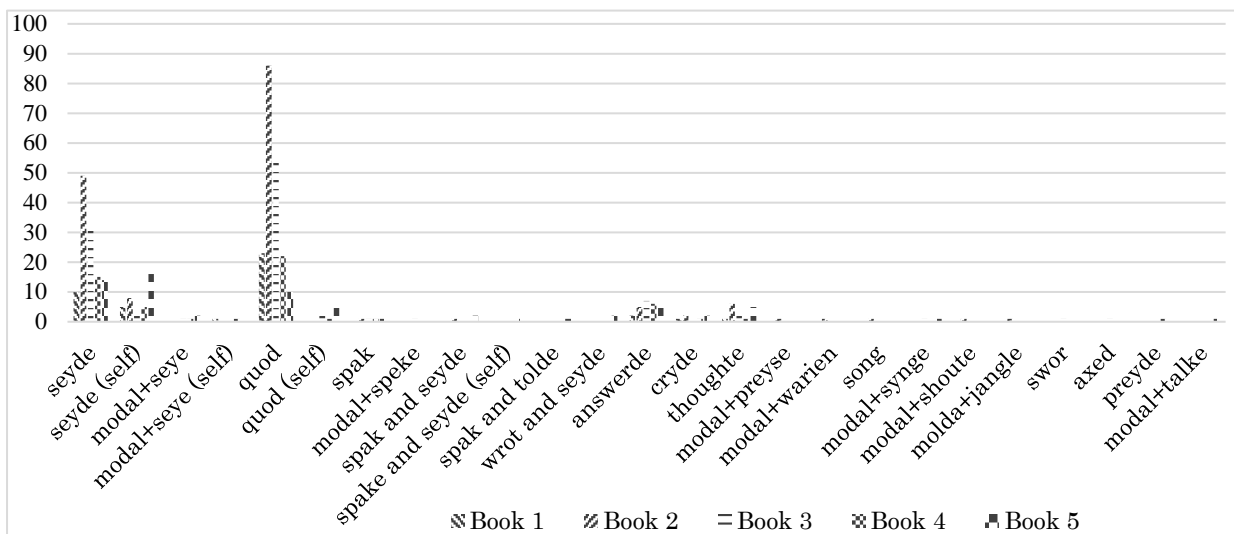


図 7: 直接話法 (DS/DT) の伝達動詞

動詞のバリエーションは、話者の心的状況 (cryde, shoute, jangle, swor, preyde) を表しており、劇的な効果を奏している。

直接話法に対し間接話法は著しく少ないが、その伝達動詞のバリエーションは、表 8・図 8 に示す通りである。

表 8: 間接話法 (IS/IT) の伝達動詞

	Book 1	Book 2	Book 3	Book 4	Book 5
seyde	2	2	2	3	5
wroot and seyde	0	0	0	0	2
axed/asked	0	0	1	1	2
modal+axen	1	0	0	0	0
modal+freyne	0	0	0	0	1
swor	0	1	3	0	2
tolde	0	1	0	0	2
modal+telle	0	0	0	0	1
modal+biseche	0	0	0	0	1
preyede	0	0	0	0	1
thoughte	1	3	5	2	9
semed	0	0	1	0	0
felte	0	0	1	0	0
modal+deliberen	0	0	0	1	0
wenden	0	0	0	1	0
modal=ymaginen	0	0	0	0	1
ymagynyng	0	0	0	0	1
mette	0	0	0	0	1
dradde	0	0	0	0	1

quod は皆無である。seyde と thoughte が他を圧倒している。他の動詞の頻度は少ないものかなりの多様性が見られる。間接話法のみに使われる semede, dradde, felte, imagyne などがあり、人物の心的状況「懸念」、「想像」、「感覚」などが細かく描き出されている。

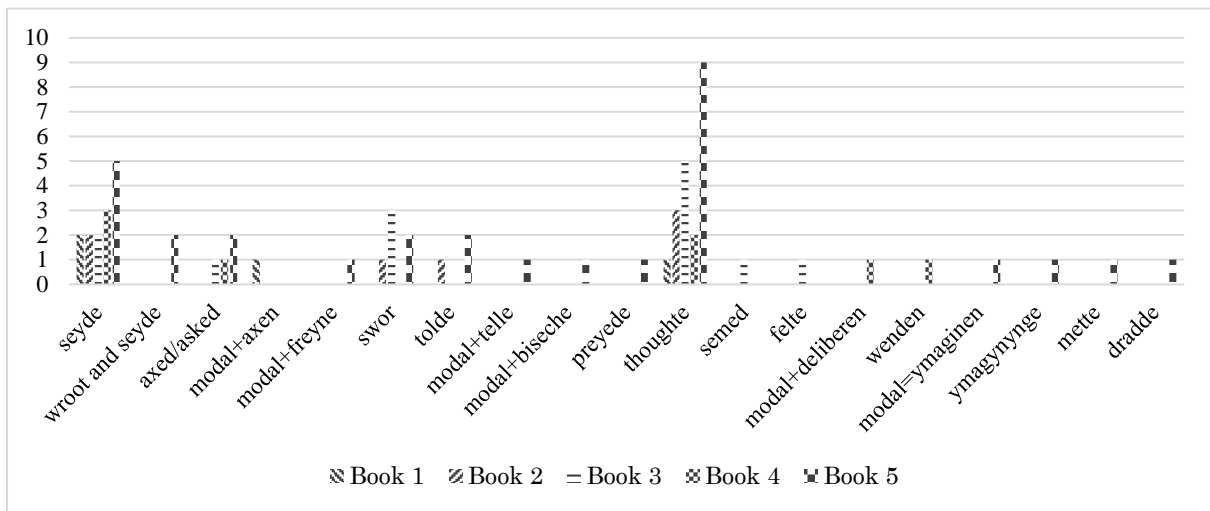


図 8: 間接話法 (IS/IT) の伝達動詞

#### 4.5. 直接話法 (DS/DT) における seyde、quod 他の統語的位置と文法化

表9・図9に示すように、seydeは文頭位置が大半で、文中と文尾はごくわずか、逆にquodは、文頭は少なく、大半が文中と文尾である。

表9: 直接話法(DS/DT)におけるseyde、quod他の統語的位置

DS/DT	Initial	Medial	Final	Total
seyde	157	8	4	169
comb: a/s + seyde	15	0	0	15
quod	45	109	55	209
thoughte	13	3	0	16

注：a/sは answerde/spake を示している。

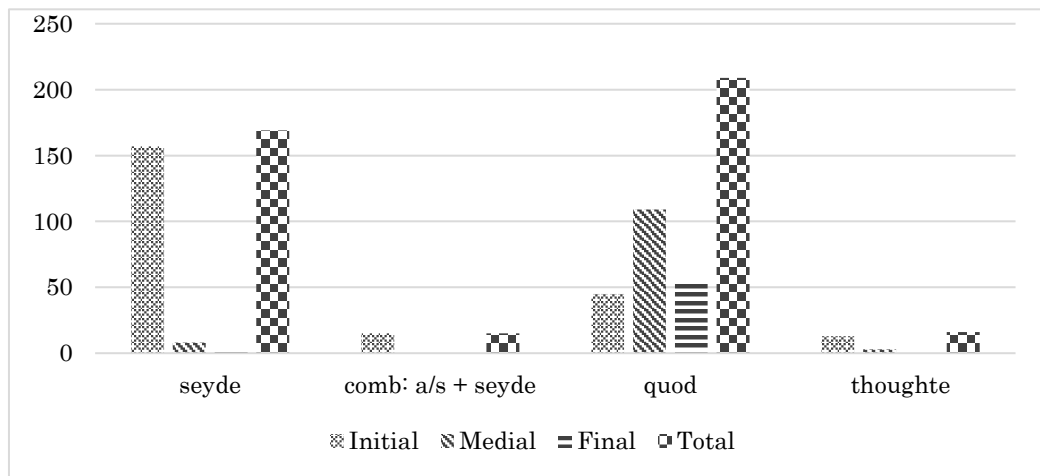


図9: 直接話法(DS/DT)におけるseyde、quod他の統語的位置

統語的位置は、語彙的な機能から文法的な機能への発達、つまり文法化の度合いを示唆する。seydeが被伝達部の目的語に対し前に現れることは、通常の動詞機能を留めていることを示している。また表7・図7に見るように、seydeは answerde and seydeのような連結形でも用いられる。この連結形では一貫して後半に現れ発話機能に徹していることから、このユニットにおいては文法化を進めていることが分かる。しかし、seydeで最も注意すべきはその記述性にあり、多くの場合前にジェスチャー、表情、音調などを表す表現を伴い導入されている。語り手はいわば劇のプロデューサーとして人物の心的状況 (theatrical device) を演出する。劇的に人物の言葉を導入するマーカーとして捉えれば、seydeは談話レベルにおいて文法化を進めているとも解せる。

- 15) With that she gan hire eighen down to caste,  
 And Pandarus to coghe gan a lite,  
And seyde, “Nece, alwey1 — lo! — to the laste,  
 How so it be that som men hem delite  
 With subtyl art hire tales for to endite,  
 Yet for al that, in hire entencioun  
 Hire tale is al for som conclusioun. Tr 2.253-59

“Forsothe, so it semeth by hire song,”  
 Quod tho Criseyde, and gan therwith to sike,  
And seyde, “Lord, is ther swych blisse among

Thise loveres, as they konne faire endite?" Tr 2.883-86

This Pandarus com lepyng in atones,

And seyde thus: "Who hath ben wel ibete  
To-day with swerdes and with slynge-stones,  
But Troilus, that hath caught hym an hete?"

And gan to jape, and seyde, "Lord, so ye swete!  
But ris and lat us soupe and go to reste."

And he answerde hym, "Do we as the leste." Tr 2.939-45

(類例: Tr 2.1158-61, Tr 2.1164-66, Tr 2.1275-78, Tr 2.1198-200, Tr 2.1637-38, Tr 5.82-84)

seyde に対し quod は、文頭は殆どなく、文中か文尾であることは、もはや動詞としての本来の機能は弱化し、被伝達部に対し挿入的ないし後思案的・タッグ的な機能に移行している。かくして語彙的から文法的な機能への発達、即ち、スピーチを導入する文法的マーカーに移行していると言える。

16) Quod Pandarus, "Thus fallen is this cas -"

"Wy! Uncle myn," quod she, "who tolde hym this?"

Why doth my deere herte thus, allas?"

"Ye woot, ye, nece myn," quod he, "what is.

I hope al shal be wel that is amys,

For ye may quenche al this, if that yow leste -

And doth right so, for I holde it the beste."

"So shal I do to-morwe, ywys," quod she,

"And God toforn, so that it shal suffise."

"To-morwe? Allas, that were a fair!" quod he; Tr 3.841-50

quod は、4.4 で示したように、直接話法に限定され、かつこの動詞は過去形しかない。更に seyde のようにジェスチャーや表情を表す言語要素を伴うことは極めてまれである。直接話法を導入するマーカーとしての文法化は明らかである。

#### 4.6. seyde と quod の被伝達部の語彙数

直接話法において seyde と quod は文法化の度合いにおいて大きく違っている。それぞれの動詞がとる被伝達部のスコープには差がある、つまり seyde のスコープが広く、quod は狭いのではないかと想定し、語数を調査した。seyde は quod よりも語数が多いことが分かった。seyde は 1 語から 1098 語まで、また quod は 2 語から 821 語まで幅があるが、語数の平均は、seyde が 98.41 語、quod が 55.29 語である。

間接話法での seyde の語彙数は、直接話法に対し大きく減じられる。最小は 1 語、最大は 33 語、平均は 8.33 語である。間接話法はスピーチ・思考に対して語り手がまとめるように編集しており、短くなるのは自然である。また統語的に見ると、動詞が補文である被伝達部を強く規制するが故に直接話法に比べ、スコープが狭くなったと考えられる。

#### 4.7. 伝達動詞の時制

語りは基本的に登場人物の過去の経験を再現するもので、伝達動詞は過去形であることが予想される。本作品において例外なく過去形で表されている。しかし、同じ伝達動詞でもチョーサーと同時代の作品、頭韻詩 *Sir Gawain and the Green Knight* と Langland の *Piers Plowman*、脚韻詩 Gower の

*Confessio Amantis* では、過去形に限定されることなく、かなりの頻度で現在形も用いられている。

*Sir Gawain and the Green Knight* (テキストは Andrew and Waldron 1978, rpt. 1994) の例は 17) の通りである。

17) Þen carppez to Sir Gawan Þe knyzt in Þe grene, [carp(p)(e)=speak, say]  
‘Refourme we oure forwardes, er we fyrre passe. 377-78<sup>4</sup>

For aftter mete with mournyng he melez to his eme [mel(l)e=speak, say]  
And spekez of his passage, and pertly he sayde,  
‘Now, lege lorde of my lyf, leue I yow ask. 543-45

And siþen ho seueres hym fro and says as ho stondes,  
‘Now, dere, at Þis departyng do me Þis ese: 1797-98

Braydez out a bryzt sworde and bremely he spekez —  
‘Blynne, burne, of Þy bur! Bede me no mo! 2319-22

Langland の *Piers Plowman* (テキストは Schmidt, 1<sup>st</sup> edn. 1978, 2<sup>nd</sup> edn. 1995) の例は 18) の通りである。

18) Curteisly the Kyng thanne comseth to telle;  
To Mede the mayde he melleth these wordes;  
‘Unwittily, womman wrought hastow oft; Passus III, 104-06

“Lorde, who shal wonye in thi wones and with thyne holy seintes  
Or resten on thyne holy hilles?” — This asketh Daudid. Passus III, 235-36

“I am *via et veritas*, seith Cryst, “I may auauunce alle.” Passus IX, 161

“Lo!” seith holy letterurre, “whiche lordes beth these shrewes!” Passus X, 27

Gower の *Confessio Amantis* (テキストは Macaulay 1900, 1901, rpt. 1969) (第8巻、Apollonius of Tyre) の例は 19) の通りである。

19) He seith, ‘Ma Dame, be your leve  
Mi name is hote Appolinus, 740-41

Bot Cerymon the worthi leche  
Ansuerde anon upon hire speche  
And seith, ‘Ma dame, yee ben hiere, 1209-11

She seith, ‘Grant mercy, lieve sire,  
God quite it you, ther I ne may.’ 1254-55

And sche, that hath hise wordes nome,  
Ansuerth and seith, ‘My name is Thaise, 1716-17



Gower (*Confessio Amantis*, 第8巻、Apollonius of Tyre)は間接話法においても現在形伝達動詞を多用し(現在形の連続性に注意)、チヨースーとは大きな隔りがある。

20) And sche dede as hire fader bad,  
 And goth to him the softe pas  
 And axeth whenne and what he was,  
 And preith he scholde his thoghtes leve. 736-39

He seth thei maden hevy chiere,  
 Bot wel him thinkth be the manere  
 That thei be worthi men of blod,  
 And axeth of hem hou it stod; 1631-34

This king, which nou hath his desir,  
Seith he wol holde his cours to Tyr. 1887-88  
 (類例: 626-30, 633-35, 766, 872-74, 1241-45, 1236-39)

直接話法、間接話法を問わず伝達動詞の現在形は、第一義的に口承的な語りにおいては物語内の過去の出来事を物語外の語りモードに近づける。このようにして語り手と聴衆は、登場人物とまるで<今>、<ここで>のように経験を共有する。第二義的には時空間、プロット、視点、語り手の態度などを転換させる近代小説の「歴史的現在」のようでもある<sup>5</sup>。この使用は既に中世から始まっていたのか、またオーラリティとリテラシーというコミュニケーション・メディアの違い・兼ね合いの問題であるのか、今後見直していく必要がある。

#### 4.8. 直接話法に見る伝達動詞のゼロ化 (FDS/FDT)

直接話法における伝達動詞のゼロ化は、4)では FDS/FDT に位置付けられる。テンポの速いスピーチにおいて、主体をそのつど示せば、人物間の思考あるいは意識の流れが中断してしまう。語りの中で最も劇的な箇所と言っても過言ではない。人物のスピーチは被伝達部の言語指標(相槌、直示語、省略文など)で明らかで、主体が誰であるかは対話の応答で同定される(口承的に音調で識別されよう)。省略されている話者は[ ]で示した。

21) “What, nat as bisyly,” quod Pandarus,  
 “As though myn owene lyf lay on this nede?”  
 “No, certes, brother,” quod this Troilus,  
 “And whi? For that thow scholdest nevere spede.”  
 “Wostow that wel ?” — “Ye, that is out of drede,” [Pandarus]  
 Quod Troilus; “for al that evere ye konne,  
 She nyl to noon swich wrecche as I ben wonne.” Tr 1.771-77

“But may I truste wel to yow,” quod he,  
 “That of this thyng that ye han hight me here,  
 Ye wole it holden trewely unto me?”  
 “Ye, doutelees,” quod she, “myn uncle deere.”  
 “Ne that I shal han cause in this matere,”  
 Quod he, “to pleyne, or ofter yow to preche?”  
 “Why, no, parde; what nedeth moore speche?” Tr 2.491-97 [Criseyde]

#### 4.9. 間接話法に見る伝達動詞のゼロ化：自由間接話法 (FDS/FDT) の出現

語り手の言葉において、伝達動詞が略されると、誰が見てもそうだと中性的に表したのか、特定(登場人物)の視点を通してそうなのか、まぎらわしい場合がある。直接話法の場合と違って言語指標の意味付けにも揺らぎが生じ、どちらの解釈をとるかによって人物観が大きく変容する可能性がある。4)において NRA か FIS/FIT かグレイダンスが生み出される。22)は語り手がトロイラスの凱旋を知覚し、描いている。下線部にリストされるトロイラスの属性は、誰の目にもこのような順序で印象付けられると見立てたのか、あるいはアナログ(総合)的な認識を線状的に示しただけなのか、それとも彼女の好みの優先順位(トロイラスの外観から内面への順序性)を浮き立てたのか、どのように解するかでクリセイデの人物観が変容する<sup>6</sup>。

22) Criseyde, which that alle thise thynges say,  
 To telle in short, hire liked al in-fere,  
His persoun, his aray, his look, his chere,  
  
His goodly manere, and his gentillesse,  
 So wel that nevere, sith that she was born,  
 Ne hadde she swych routh of his destresse; Tr 2.1265-70

#### 4.10. 伝達動詞を超えて：直接話法における開かれた主体

直接話法の伝達動詞は第一義的には話者・主体を限定するが、意味論的に見るとそれは参照点にすぎず、他の主体にも開かれていく可能性がある。23)の文脈はこうである。クリセイデがトロイを出て10日目、彼女がトロイへ帰ってくると約束した日、トロイラスとパンダラスはトロイとギリシャの分岐点(城壁)に立ち、彼女の帰還を今か今かと待っている。トロイラスは動き来るものを見て「彼女だ」と認識する。パンダラスはすぐさま「荷馬車」だと修正する。

23) “We han naught elles for to don, ywis.  
 And Pandarus, now woltow trowen me?  
 Have here my trouthe, I se hire! Yond she is!  
 Heve up thyn eyen, man! Maistow nat se?”  
 Pandare answerde “Nay, so mote I the!  
 Al wrong, by God! What saistow, man? Where arte?  
That I se yond nys but a fare-carte.” Tr 5.1156-62

事態はそのままにあるのではなく主体を通して認識され、言い表される。上記 3)の「表現主体の多次元構造」において、二人の認知は「視点の転換装置“T”」を介し第三番目の主体に開かれ、「商品」として再定義される。クリセイデは捕虜交換としてまるでバーター取引の商品、また荷馬車にのせて運ばれる商品でもある。一つの事態に対する認知上の境界線そのものが追究される。Fictional space ではトロイとギリシャを分ける包囲の壁、Reality space では作家チョーサーが経験するイングランドとフランスを分けるロンドンの壁(当時イングランドとフランスは所謂 100年戦争 [1337-1453]の最中であつた)、これら二つの壁は認知の境界線を身体化する。

以上、伝達動詞を10の観点に分け多面的に分析し、その構造と機能を考察した。

#### 5. おわりに

チョーサーの話法において伝達動詞がどのように構成され、また機能するかを『トロイラスとクリセイデ』を例に調査した。表現主体の構造と話法タイプを理論的基盤として、10の観点から分析した。要約す

ると次の通りである。

- [1] 語りにおける主要登場人物の言葉 (DS/DT, FDS/FDT) : 主要登場人物の言葉は、語り手の言葉と拮抗し、劇的な特徴を有している。
- [2] 主要登場人物の直接話法 (DS/DT, FDS/FDT) と間接話法 (IS/IT) : 直接話法が間接話法を圧倒している。劇的仕組みと同時に物語の口承伝達の影響が考えられる。間接話法において伝達動詞 (過去形) と被伝達部の時制は、一致 (concord) していた。しかし、チャーサーの他作品や同時代の作品では、不一致が散見される。
- [3] 主要登場人物のスピーチ (DS, FDS, IS) と思考 (DT, FDT, IT) : 思考はトロイラスが全巻を通して多いが、クリセイデがギリシャ陣営に送られた第 5 巻において特に際立っている。
- [4] 伝達動詞のバリエーション : seyde と quod が大方であるが、頻度は少ないもののバリエーションがあり、人物の心的状況を細かく表している。
- [5] seyde と quod の統語的位置と文法化 : seyde は文頭が大半である。他方 quod は文中と文尾が大半で、人物のスピーチを導入する文法的マーカーとして定着、文法化を発達させている。また seyde はジェスチャーや音調を伴って導入され、劇的な手法として効果的である。
- [6] seyde と quod の被伝達部の語彙数 : seyde の方が quod よりも語彙数が多い。伝達動詞の統語的位置ないし文法化の度合いが影響している。
- [7] 伝達動詞の時制 : チャーサーの『トロイラスとクリセイデ』は一貫して過去形であるが (彼の他作品においても、このことはほぼ当てはまる)、同時代の他の作家では現在形が散見される。
- [8] 直接話法の伝達動詞ゼロ化 (FDS/FDT) : スピーディな会話では、思考や意識の流れを疎外しないように、伝達動詞が省略されている。
- [9] 間接話法の伝達動詞ゼロ化、自由間接話法 (FIS/FIT) の出現 : 語り手の中性的な表現なのか、人物の視点が入った主観的な表現なのか揺らぎが生じている。
- [10] 伝達動詞を超えて、開かれた主体 : 伝達動詞で主体を限定しても、その主体は抽象化した次元・主体に開かれ、循環的に新たな解釈を生み出す可能性がある。

伝達動詞を切り口にチャーサーの話法の仕組みの一端を捉えてみた。『トロイラスとクリセイデ』における結果がチャーサーの他の作品、更にはチャーサーと同時代の作家の作品とどの程度に共通し、どの程度に特異なものか、更に調査を推し進めたい。

#### 【注】

1. Type と Token 頻度の集計は Laurence Antony's AntConc (A freeware corpus analysis toolkit for concordancing and text analysis) (閲覧日 : 2020年12月28日) を使用した。  
<https://www.laurenceanthony.net/software/antconc>.  
形式の違うものは違った Type とし、観念による抽象化・見出し語化 (lemmatization) は行っていない。
2. 『トロイラスとクリセイデ』の劇的要素の度合いは、チャーサーの他の作品及びチャーサーと同時代の頭韻詩 *Sir Gawain and the Green Knight* と *Piers Ploughman*、及び脚韻詩 *Confessio Amantis* と統計的に比較検討、相対化する必要がある。また会話の言語指標では中世劇、*The Townley Plays* と比較し、バリエーションの傾向性及び頻度を精査する必要がある。
3. 直接話法と間接話法の判断が難しい場合もある : He seyde he nas but lorn, weylaway! / "For al that comth, comth by necessitee: / Thus to ben lorn, it is my destinee. Tr 4.957-59. 間投詞 weylaway は seyde の間接話法のスコープ内にあるのか、次の直接話法の冒頭部になるのか、微妙である。Benson (1987) は間接話法に含めている。本論では Benson に従った。
4. 頭韻詩では波線の語から分かるように頭韻の要請で伝達動詞が選択される場合もある。『トロイラスとクリセイデ』はライムロイアルの脚韻詩 (ababbcc の脚韻パターン) であるが、modal は伝達動詞を原形

にし脚韻を踏ませている。Upon the walles faste ek wolde he walke, / And on the Grekis oost he wolde se; / And to hymself right thus he wolde talke: Tr 5.666-68

5. Cf. Casparis (1975: 72): In these novels the switch from one tense to another does not reinforce or coincide with parallel patterns, as is usually the case with tense-structured novels; patterns which break up the story rhythmically and/or temporally and/or spatially and/or for reasons of plot, point of view, narrator's attitude, etc.
6. FIS/FIT の話法の詳細は、Nakao (2013: 94-99)と Nakao (2018b: 246-48)を参照されたい。

#### 【参考文献】

- Andrew, Malcolm and Ronald Waldron, eds. 1978, rpt. 1994. *The Poems of the Pearl Manuscript*. Exeter: University of Exeter Press.
- Benson, Larry D., ed. 1987. *The Riverside Chaucer*. 3rd ed. Oxford: Oxford University Press.
- Casparis, Christian Paul. 1975. *Tense without Time: The Present Tense in Narration*. Bern: Francke Verlag.
- Fleischman, S. 1990. *Tense and Narrativity: From Medieval Performance to Modern Fiction*. Austin: University Texas Press.
- Fludernik, Monika. 1993. *The Fictions of Language and the Languages of Fiction*. Abington: Routledge.
- Kittredge, G. L. 1915. *Chaucer and His Poetry*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Macaulay, G. C., ed. 1900, 1901, rpt. 1969. *The English Works of John Gower, 2 Vols.* EETS E.S. 81, 82. Oxford: Oxford University Press.
- Moore, Collete. 2011. *Quoting Speech in Early English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Nakao, Yoshiyuki. 2013. *The Structure of Chaucer's Ambiguity*. Frankfurt am Main: Peter Lang.
- 中尾佳行. 2018a. 「チョーサーの話法の意味論—『トロイラスとクリセイデ』における話法の多次元構造—」福山大学大学教育センター『大学教育論叢』第4号、17-36.
- Nakao, Yoshiyuki. 2018b. “The semantics of Chaucer's speech/thought presentation in *Troilus and Criseyde*: The emergence of conceptual blending.” In Hideshi Ohno, Kazuho Mizuno, and Osamu Imahayashi (eds.), *The Pleasure of English Language and Literature: A Festschrift for Akiyuki Jimura*. Hiroshima: Keisuisha, 241-60.
- Parkes M. B. & Elizabeth Salter, eds. 1978. *Troilus and Criseyde Geoffrey Chaucer: A Facsimile of Corpus Christi College Cambridge MS 61 with Introductions by M.B. Parkes and Elizabeth Salter*. Cambridge: D.S. Brewer.
- Schmidt, A.V.C. 1<sup>st</sup> edn. 1978, 2<sup>nd</sup> edn. 1995. *William Langland The Vision of Piers Plowman: A Critical Edition of the B-text Based on Trinity College Cambridge MS B.15.17*. J.M.Dent London: Everyman.
- Short, Michael. 1982. “Stylistics and the Teaching of Literature with an Example from James Joyce's *Portrait of the Artist as a Young Man*.” In Ronald Carter (ed.), *Language and Literature*. London: George Allen and Unwin, 179-82.
- Spearing, A. C. 2005. *Textual Subjectivity: The Encoding of Subjectivity in Medieval Narratives and Lyrics*. Oxford: Oxford University Press.